

被爆者証言「運命の八月六日」

米吉 喜代子

私は米吉 喜代子（こめよし・きよこ）と言います。今年84歳になります。

私が10代にとっても辛い経験をしました。次の世代の方々に核兵器廃絶と世界平和実現を願ひまして、私の被爆証言ができますことを嬉しく思っております。

私は1932年7月18日に中区天満町に生まれました。天満町は市の中心街で、原爆ドームにも近く、ドームの周りや本川で泳いで遊んでいました。

原爆を思うとき、小学校から女学校への受験の経緯を切り離して考えられない思いを持っております。私は天満小学校卒業後、13歳の時、4月にめでたく第二県立女学校に合格できました。

アジア太平洋戦時中なので、日曜日でも夏休みもなく、八月は学校での勉強もなく、雑魚場町で連日家屋疎開の後片付けでした。八月五日に作業が終わり、六日急遽、東練兵場へ芋畑の草取りに行くことになりました。

私たち一年生は全員100名、二年生は東西組の級長がジャンケンをして、勝った東組が50名、合計150名が東練兵場に行くこととなりました。

七日はまた、全員、雑魚場町での作業ということで別れました。

当日の六日、父親が早起きして作ってくれた弁当を持って、元気な者は乗り物を利用しての通学は出来ないのですが、ひさしぶりに電車に乗って、東練兵場に到着し、決められた畑に入り、作業を始めました。作業開始して間もなく、「B29が来ているよ！」と周囲の友達が騒ぎ出し、立ち上がって見上げるとその時強烈な閃光とともに一瞬、熱湯を浴びせられたような熱線を後半身に感じ、芋畑の畝（うね）の中に耳と目をふさぎ、伏せました。

どのくらい経ったか、周りのざわめきで我に返り、目を開けると暗闇です。思わず、顔をつねってみました。「生きている！」「逃げなければ！」持ち物を置いた場所に向けて暗がりの中を走りました。周囲が段々と明るくなり、見渡せば、無傷のものは何一つなく、木々は折れ飛び、電柱は倒れ、電線は垂れ下がりが、家々は無残にも倒壊し、瓦や多くのものが吹き飛ばされ、歩いて来た道も

通れるものではありません。持ち物を捜しましたが、爆風に吹き飛ばされて見つかりませんでした。

集まって来た友達も一人として元の姿の者がなく、服もボロボロに焼きちぎれ全身の皮膚も垂れ下がり、目も口もふくれあがって、次第に誰かわからなくなっていました。仲良しの友達がうずくまっているのがわかり、駆け寄って、「手を引いてあげるから、肩を貸してあげるから、一緒に帰ろう」と声をかけましたが「目が見えなくなったし、足も歩けなくなったので。捜しに来た父に会ったら、ここに居ると知らせてちょうだい」と言いました。誰だか判別出来ないくらい、全身が火傷をしていました。

その時、担任の先生の声が耳に入りました。「ついて来い、ついて来い！」と大きな声で叫ばれ、大勢の友達が追いかけてきました。はぐれてはいけないと必死に、見失わないようについて行きました。にぎ津神社の前庭の木々も折れ、たれて、燃えており、火の粉を払いながら、牛田の先生の家につきました。

先生の家はくずれてはいましたが、家の前で腰を下ろし、前の小川へ足をつけてホットしました。全部で20人位いたでしょうか。その時には、「水を飲んだら死ぬぞ、水を飲むな！」と、大きな声で叫んで歩く人々があり、体中は燃えるように熱く、「水が飲みたい、水の中に体を沈めたい！」と願いながら我慢しました。

周りにいた友達が「背中が燃えているよ」と教えてくれ、上着をぬがせてくれた。背中を中心部は焼け落ち、周りの布がくすぶり、煙が出てきました。その時初めて後頭部から背中、両腕が大きな水膨れになって、火傷をしていることに気づきました。痛さよりも「水が飲みたい！水を頭からかぶってみたい」、という思いを必死にがまんしていました。

先生の家のおすぐ近所まで火が迫ってきたので、皆を連れて、神社のある山の上に避難させ、「迎えに来るまで絶対にここを動いてはいけない！」と言われて家に帰られました。山中も多くの被爆者で、右往左往する人、大けがや、大やけどで倒れている人、死んでいる人、泣き叫んでいる人、まさに地獄図です。昼間と思われるのに、青空も太陽もなくて夕ぐれのような中に座っておりました。

何時間たったか、やっと、先生がみえ、市中の火の手もだいぶ下火になったよう

Only 2 pages have been converted.
Please go to <https://docs.zone> and **Sign Up** to convert all pages.